



里見八犬傳

第六輯

卷三



709
28



門 13
 號 109
 卷 28



明治三六年
 十月九日
 購

南總里見八犬傳第六輯卷之三

東都 曲亭主人編次

第五十五回

馬大記賺言して途小籠山を窮せしむ
 粟飯原滅族せられて里小犬坂を逃む

品七も與小衆して馬加が隠隠の長物より時を移せ小文吾耳を側ぞ之感嘆
 膝の進むを覺え春の日は只をせり短くも人必ひる當下品七小文吾が泣て
 せし茶を遠くくも喫く縁頼のほり多扇を把之膝小突建る程小馬加
 大記常武のその夜腹心の若黨をあちこちへ差向く粟飯原亂度か起行や否を
 んもと遣せよとの言且歸す栗飯原敵ハ黎明の比主従大約十人許行
 装を整へて栗橋のうへに赴知ぬと報へ常武の中も領きその日赤塚の
 城の伺候して時夜の安否を訊せし自胤對面あひひくきの八守光

八犬傳第六輯卷之三

講義堂藏

左右等一々縁連をさし挟むの攻戦へいられ暇はあらず時不並松の
 樹蔭より頼破りせし一箇の癖者忽然と頭れかく道次不捨措き嵐山の
 尺八小棒落葉の両刀を早く箱より引出し小腕抱き逃んとす
 程もあらずを亂度か鎗奴送ふことぞんじ。罷ていさく走り來り癖者
 等と呼けり鎗を捨て刺んとほむが癖者八件の三種を後方へ撲地と
 投遣り巨刀と引技受とめ逆へ進て追つ返す丁々幾石と戦なりその
 間不又樹蔭より頼破りせし奇怪の賤婦輾か似く走り出く笛と刀を
 搔取く舊の樹蔭小躲く程小怯む桃むこの癖者鎗の蛭巻所出て
 返す刀不鎗奴を砍けし血煙ハ映残る王莽時樹蔭を出入賤婦と目を
 指しつ微笑え造化精妙と夕川昏る連拉く逃亡たり。さる程小籠山
 逸東太縁連ハ既小件の癖者ハ笛と両刀を奪畧る為体を遙まらん。

吐嗟と息と金吉銀吾と劍を削る真中おれはあらず忙巻ハ乱る金吉銀
 太刀小鬚三寸浅痕を負く既小危くを折る縁連が後者ハ四五人
 齊一走り來り金吉銀吾を前後左右ハ推取籠く攻つけく遂に刀不砍
 けし。さる程頭を捕るけり。かり一程小亂度が後者ハ或ハ撃れ或ハ逃
 亡敵一人ハあらずなり。これハ縁連ハ緊要ある笛も宝刀も癖者ハ奪去れ
 らるれば有難くあら安らした。ゆを往方を索んとあども一日ハ暮れ
 如此も他領のさるれば後難も亦料がごとし。思ひ久せば忙々して躬方の
 死骸も捨措つ亂度主後三級之首をりを携り路引ちて走りつ。
 その夜を岩槻のほとりある古寺小曉せしがはくくと思慮る不。さる
 亂度と討捕られども緊要なる笛と両刀を癖者ハ奪れればおら
 解んてく。況撃漏るる亂度ハ後者ハのこれより先ハ走り帰て

あり。ち。う。え。有つる。終。小。訴。お。う。さ。び。が。私。の。恨。小。あ。く。亂。度。を。扱。く。へ。て。を。欺。撃。小。を。ま。と。と。ま。ん。ゆ。と。ひ。か。ま。罪。の。命。小。及。ぶ。と。も。あ。ま。し。所。詮。赤。塚。へ。ゆ。る。に。甚。危。く。還。ら。れ。ば。安。忍。不。似。う。り。父。母。ハ。既。小。世。を。逝。く。の。ま。と。妻。子。ハ。あ。ら。ん。人。を。用。る。今。の。世。ハ。あ。れ。の。國。も。み。ま。ま。主。赤。塚。小。の。日。の。照。り。の。あ。ら。三。十。六。計。逃。る。小。不。如。と。肚。裏。小。尋。思。し。つ。その。曉。く。小。只。ひ。と。り。往。方。も。あ。ら。ん。り。わ。る。を。從。者。小。い。れ。を。あ。ら。ん。天。明。く。後。小。驚。駭。だ。く。且。く。倉。後。を。疑。せ。し。う。と。も。術。あ。ら。ん。三。ッ。の。首。級。を。携。り。小。倉。阿。容。々。々。と。赤。塚。へ。還。り。來。り。し。如。此。々。々。と。栗。飯。原。亂。度。主。從。が。撃。つ。れ。る。為。併。小。嵐。山。の。尺。八。と。小。篠。落。葉。の。兩。刀。と。の。折。癖。者。小。奪。去。ら。れ。る。事。の。趣。又。麓。山。係。連。ハ。その。曉。小。旅。宿。より。逐。電。あ。ら。ん。送。り。く。け。る。あ。げ。し。小。自。亂。駭。き。且。呆。れ。く。是。非。の。思。念。小。及。び。あ。の。を。竊。小。馬。加。常。武。を。招。け。し。て。緋。云。云。

と。説。示。し。彼。當。既。小。紛。失。を。れ。ば。守。の。お。ん。咎。め。測。り。し。い。つ。小。走。り。同。意。ハ。常。武。も。殊。更。小。う。も。駭。だ。る。面。色。し。て。寔。小。あ。よ。お。れ。は。變。り。所。詮。苗。の。紛。失。も。み。か。亂。度。より。更。起。れ。ば。渠。が。妻。子。を。誅。戮。し。く。仰。け。れ。あ。ら。ん。あ。ら。ん。小。異。を。る。お。ん。咎。め。の。あ。ら。ん。ゆ。ゆ。某。緯。と。計。し。し。も。任。め。ひ。の。と。春。ま。う。し。退。だ。つ。實。亂。自。亂。の。兩。下。知。し。と。亂。度。が。長。男。小。栗。飯。原。夢。之。助。と。く。今。茲。十五。歳。小。あり。多。美。少。年。小。腹。を。切。り。せ。併。小。亂。度。が。妻。指。城。と。五。才。小。あり。る。女。見。せ。も。命。を。日。小。殺。し。て。り。只。こ。の。人。々。の。ま。か。親。族。妻。黨。も。罪。蒙。り。て。或。ハ。追。亡。し。或。ハ。閉。籠。ら。れ。て。憂。死。せ。し。め。も。多。う。誠。小。邯。鄲。一。炊。の。栗。飯。原。氏。の。栗。枯。得。失。覚。く。悔。し。地。夢。之。助。を。惜。ま。ぬ。の。あ。ら。ん。を。そ。が。中。小。亂。度。の。妾。小。調。布。と。い。ふ。も。あり。有。身。て。より。三。年。経。る。ま。で。今。の。産。の。初。を。解。く。を。醫。師。も。後。更。その。病。症。を。と。ふ。か。つ。小。決。め。り。し。こ。を。血。塊。の。病。と。し。て。と。り。く。その。療。治。を。せ。り。か。せ。

八十八年六月廿三日
六
○月大定



八天傳六軒卷三

七

角及堂

角及堂

角及堂



八天傳六軒卷三

馬加大記

角及堂

程小常武ハ彼妾調布小胤度の送腹あまきくこれをも殺さう一城。
 相憐むめの哀告て醫師をめて燈人トハ決して有身らふあは血塊小疑ひ
 とく。この方書と引つて醫師も共小寛一くとも常武ハ疑ふ。調布小墜
 胎の菜と三日づげく飲せしむ。ゆせし験のありく。原來血塊となりて遂に
 追放されけり。此は今茲より十五六年の昔ある寛正六年乙酉の冬十一月の
 りあざありき。かくて件の調布小些の由縁を心あてふ相摸州足柄郡大坂と
 山里小在りる程小かの病悩ハ血塊をその年の暮小子を産せしむ。常武は
 三年むりの後応仁元年丁亥の秋の頃誰いやくかく風毒せし常武は
 駭然あやみ。その安らぬこと。老僕袖角九念次を大坂へ遣しつ。輝の虚
 実を拂せし子を産するハ一定あれども今ハ其処中も住むて往方あれは
 ぞえく。常武ハ靴を隔く癖を撥き心持し。か月彼此と索一がも終小

便宜をぬき。又彼麓山逸東太縁連ハ千葉家恩顧の郎黨也。その
 家柄も大く。かね年尚もたれども亂度の亞小居られて赤塚殿の覺
 あり。その慈深く智淺うして年来亂度と中とありたれ。常武ハ属賂を食
 主命を用ひし。其忠信篤実なる亂度を欺撃せし。眞罰立地おのり
 報ひく。可憐に俸禄をそれ。棄て谷磨の日蔭者ふなり。知る知らぬ
 却て憎む。朝り笑ひし。あられども石濱の實胤ハ年来多病をぞと
 輝み常武一人の任用し。此ハ道世の願ひ。頻りか。當時の領所を
 悉令弟自胤小讓まぬ。その身ハ美濃ニ退隱して。いく程もかくせと遊
 あり。これゆより。鎌倉の両管領より二郎自胤を千葉介小補任して石
 濱の城小をえ置れ。武藏七郷葛西三十ヶ莊管領せし。あり。今に至
 繁昌せり。しる馬加大記常武ハ輝み己が隨意謀濟し。權勢肩を

比るものや主の自胤も渠の憚りのゆゑ多かすであらう。山の笛のやも実胤
ありや。その家督を嗣めば皆常武を徳とす。權威を貸し給へば
な。ありては合さる。胤度の撃は折常武。竊小地方の悪棍並四郎を
相憚る。件の笛と両刀を竊せざる不疑ひあり。折の賤婦八並四郎が文房の
舩虫をわかれ。後笛と両刀八並四郎が所息。中々小篠落葉に両刀を
竊ふ他郷へ賣し。其の價も倍さる。嵐山の尺八古代物の物弁て今此
笛と異れば好むを買入とのいふ。且時僧ある秋のけやら。不憚と
年来秘あはる。果して此らんあまの。比中途。阿佐谷の村長を撃
走し。舩虫を奪去。去る殺人の癖者も馬加との。間諜者一同定。狐とあかん
つや。これ舩虫が責られて。昔はあま首伏せば。彼人の舊悪はあらうべし。と
あが。ゆゑ。あかん。を推。笛り。辛く。閉。籠。措。も。と。疑。念。あ。ら。ぬ。ん。斯

長々。れ。彼。人。の。年。末。の。悪。計。を。誰。も。知。ら。ぬ。と。い。ふ。と。あ。ら。う。一。不。祖。渡。増。松。と。い。ふ。危
後。若。黨。ハ。馬。加。と。の。腹。心。に。て。機。密。を。掌。り。さ。れ。ど。も。解。あ。ら。ぬ。賞。祿。の。多。く。あ。ら。ぬ
こ。こ。恨。み。を。件。の。機。密。を。あ。る。人。に。如。此。々。と。漏。せ。し。語。續。け。ば。今。で。は
知。ら。ぬ。もの。も。あ。ら。ぬ。か。の。威。勢。不。憚。を。い。は。し。上。る。もの。も。あ。ら。ぬ。が。守。り。あ。ら。ぬ。と
あ。ら。ぬ。馬。加。と。の。あ。ら。ぬ。の。う。い。ふ。疑。ひ。あ。ら。ぬ。性。か。れ。ば。彼。増。松。が。口。を。利。を。時。り。て
妻。飼。と。せ。れ。ぬ。程。も。あ。く。増。松。ハ。一。文。睡。滅。死。ま。り。か。れ。ば。あ。ら。ぬ。朝。野。の。食
物。不。用。心。に。て。鈍。く。な。れ。謀。ら。れ。ぬ。と。い。ふ。と。其。く。程。小。男。比。童。が。と。女。饌。を。い。ふ。と
この。程。中。の。後。方。の。長。物。を。い。ふ。と。小。文。吾。が。袂。を。掖。て。夕。餉。の。箸。を。把。り
あ。ら。ぬ。と。い。ふ。と。小。文。吾。と。其。不。駭。く。品。七。ハ。慌。忙。に。第。を。取。て。塵。拈。集。ま。り
引。提。つ。折。戸。の。や。う。小。立。如。く。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。と。外。面。より。人。の。身。を。鎖。と。扱。き。く
品。七。と。い。ふ。と。楚。と。閑。れ。ど。も。現。存。ら。ぬ。ぬ。人。の。口。天。言。ハ。声。か。く。と。い。ふ。と。あ。ら。ぬ。と。い。ふ。と。隠。匿。の

掩ひてさしを以てあつた。と小文吾竊る舌を掉く。と終饌に向ひても箸とる
 此の頼み事もおのれ歎息の已むく。かゞその日の暮果て甲夜よりある春
 雨の音蕭然、更蘭之のを寂、此の鐘の声疎れぬまふ小文吾の獨り、
 多きを彼常武の人となり、これも大に猜せり。ともの品七が巨細あり、ひ
 かくその隠意を、つてもその資を、かゞその後の用心のつらさを
 されば馬加が若堂の担渡増松とふの、毒殺せられたり、一條の今
 ゆるみ合はれ、まれば亦日あり、食後猛に腹痛をい、堪がなれば日の
 あり、赤菜の貯藏あり、かくれば、獲身囊にまもり、披き感得秘藏の玉を
 生じて或は、尾へ推當つ、又ある口を合て、その玉液を吸入、程に苦痛
 忽地、さしに心持清々、つらく、幾度と、その玉を、さしに必
 かの腕中あり、毒の中入れ、と、尺の玉の奇特に、依て、さし、毒あり、

かん嚮の犬川、莊助が、大石憲重の、獄舎の、笞杖の、撲傷の、頭、亦、枝
 玉の、美應、ぬれば、裕と、云、恰との、ひ、玉の、加護、疑、れ、か、つ、神、多、く、妙、智
 くの、世、の、塞、翁、が、馬、中、に、田、川、の、窮、厄、十、條、力、上、尺、八、ホ、が、助、あり、と、吾
 曹の、あ、ひ、ひ、け、か、く、虎、口、を、脱、れ、今、千、葉、家、の、尺、八、ホ、を、多、く、分、を、殆、危、く、せ、り
 彼の、忠、信、義、烈、の、兄、弟、此、の、音、曲、尚、古、の、名、物、尺、八、の、名、八、等、一、と、利、害、損、益
 甚、異、あり、と、む、厄、今、小、解、む、と、且、ども、彼、栗、飯、原、小、比、ね、バ、屑、も、あ、る、り、に
 此、の、よ、も、栗、飯、原、氏、の、送、腹、の、子、ハ、生、育、一、次、宇、宙、の、間、ハ、不、平、の、う、渠、小
 あり、つ、もの、あり、あ、る、鳴、呼、憐、む、と、憐、む、と、と、繰、返、し、る、骨、の、中、ハ、積、る、日、教、の
 春、過、く、夏、ハ、来、れ、ど、も、彼、品、七、ハ、後、掃、除、小、来、る、と、か、れ、バ、小、文、吾、竊、る
 誹、り、て、一、日、又、草、刈、小、来、る、蒼、頭、小、彼、品、七、が、つ、を、向、か、ふ、その、ゆ、ら、を、
 為、ら、し、品、七、ハ、何、る、月、の、日、が、あ、り、と、あ、る、庭、掃、除、小、来、る、次、の、日、に、又

つて。俄頃不心地煩し。とくも臥して程もかく夥しく血を吐く。真夜中比
あまりの生半病ひ氣のあつて風ども引ぬ老痴あり。小食傷あり
少けん健ありとく懸まほ。現命数六豫てより量知らぬものなり。つて
駭く小文吾のあひまはるけぬと心どや。肚裏めめや。原來かめ目小文饌を
来たるる男童の品七グ長物よりと幾條もとて主の常武が告り
つて。常武の品七と憎む毒殺せ。かん噫馬加人々を害す毒惡何そかく
執念深き彼品七は兄弟犬飼現ハダ実父糠助とゆり由縁のわたり
つて。谷を隔く響をむ心の悼と誰や告ん定小口ハ禍の門なりと
舌を掉く是ありの凄物食小毎ふ必あらま王と詠りく彼毒計を懐ひる
第五十六回 朝用野歌舞して暗小釵児を送
小文吾諷諫して高く舟水と論也

馬加大記常武が去歳の七月小文吾を推苗め肉籠る言と心かく又當時既
あまの被犬田小文吾ハ智勇究やく悔りがして渠の當家小仕へ必は其の仇と
あらん仕れい今追遣りて他一諸彦の佐とせもあつて不快くかかれ渠を竊
害して後安くせむと介後枕中の毒をあへく小文吾ハ羞めりせし。さ
驗もあらう。くあをのつと詠り。又烈に毒を飼ふと六七遍お及びか
ども僅小半時ども病煩れともあはれ常武が呆れ果て彼奴ハ神仙不
死の術を受らるるものあらう。さか後今死あまもこの処へ出不出さば何ぞ
とくあらせんやと。いり鎖を繋し。その害せんと謀りて。且くあひとま
程小の年ハ果敢かく暮ら次。の年の春三月の比庭掃除する蒼頭品七が
一日小文吾ハ長物より此事の趣その顛末ハ定うあなね。さ
悪むを告る。その折配膳の男童がむちあけぬ。さ
一犬傳六卷之三 十一

常武は報しうが常武中さうも領たされ日ごより汝小を密張孔目よ
あつてこそこれらの子を知らぬ誰中もあれこの事もさう陰さうさう此の
とく知らせると長き示しと壺ある菓子と紙と包とを投与へり
これ あやふし 品と心を憎むる然とも罪せんやのあれば果しと
小文吾が猜せしごとく竊小毒殺あつてこれありく常武はしる不思議を
旋の品と奴とを嗜りあり小文吾の大さうをばいさう人を知りてかたこれい
年来大望あり彼身徳の例に倣く自胤の腹を切らせし子鞍弥吾常武
當城の主とて千葉介さうもめんとあつて日ハあれども自胤の鎌倉ある両管
領より後衛あり管領されを非義とて大軍とて攻られあつて毛を吹て死を
求ふとあつて年月さうもあつて不便さうもあつて小文吾さうも腹心と
あつてあつて先主の孔明後醍醐の楠公もあつてさうもあつてさうもあつて

計較既小決りつ折も欲得とあつて程小此さう鎌倉より女田樂の色子共
五六名石瀨の城下小来さうりしゆ不常武はさうも声色との嗜む鳥辭の
騎者ありたればはる技小長て且貞妍に淫婦をまう婢妾とて生平小歌舞せ
わのさうもあつて他郷より来ぬ俳優も已が愛さるものあればその
費を數ふとさうも幾月の久しとあつて酒宴の興あを備ふるさうも
この度も件の女田樂小と招けりさうもその技を試さうもさうも中且開野と
少女の年ハ二ハさうりあつて顔色も美しく技小堪能のものありたればを只一人
留置さう一日若僕九念次とあり小文吾はさうもさうも去歲初秋一面識の後
白駒の足撥速さうさうも暮月もあつてたより豫てもあつてさうも主君の疑念
解ぬ良菜口小苦の故小諫言その甲斐あつた恥さうも心あつてさうも疎遠に過
り斯長さうりた筆居とて痛さうもあつて切さうもあつて母屋へ招きて

慰む。と月よりあり。ついで方便を旋り。主君へはえあげ。この一條
 の許され。今宵後堂より産面を御進せんと欲せ。既す
 時刻より九念次小案内をとり。さうくをへす。余の面會と期
 して。意中を盡し。白章の紗赤。白夾衣。袴。下領。とり具。こ
 出物。贈り。小文吾。ひひ。け。常武。懇切態。招請。小
 眉。擲。渠。又。何。計。較。ん。を。害。せん。あ。べ。し。と。あ。ひ。め。つ。今
 推。辞。バ。必。臆。せ。と。後。々。ま。も。突。ん。只。命。運。を。天。小。儘。して。心
 を。不。如。と。あ。ひ。夫。あ。忽。地。荒。然。と。う。咲。て。ゆ。て。か。れ。懇。命。を。推。辞。せ
 ら。ん。を。女。礼。の。ん。小。貴。教。不。心。く。内。席。を。汚。し。ま。さ。旅。お。わ。れ。ば。れ
 服。不。支。缺。ぬ。を。猜。し。ぬ。る。財。物。の。と。え。な。れ。ば。これ。も。辞。つ。身。小。着。見
 参。入。る。べき。且。く。折。せ。ぬ。り。と。志。す。次。の。間。小。退。れ。刺。着。苧。扱。て。夾

衣。私。く。遠。く。片。足。り。小。踏。入。し。袴。の。紐。を。前。う。ら。楚。と
 結。中。刀。の。鞆。釘。を。潤。も。當。座。の。用。心。扇。を。賈。ふ。と。が。現。人。品
 整。姿。の。華。美。だ。引。提。す。物。稀。室。小。刀。の。端。突。立。く。誘。と。さ。り。小
 揖。これ。九。念。次。先。小。立。く。庭。より。導。く。卷。石。傳。ひ。小。開。ぬ。関。の。諸
 折。二。八。開。放。せ。彼。方。の。廣。度。過。く。長。廊。の。浮。橋。渡。後。堂。縁。煩
 あり。伴。ひ。その。馬。加。常。武。の。遠。く。出。迎。へ。小。文。吾。が。名。を。携。つ。
 賓。席。小。推。居。る。と。小。文。吾。へ。固。く。辞。ひ。く。敢。て。の。席。不。當。ら。ば。さ。ぐ。請。れ。て
 せ。初。く。不。東。面。小。坐。を。占。く。迷。小。寒。暖。を。迎。安。否。を。問。小。程。小。鎌。倉。様。小。結
 髪。を。る。女。童。が。ゆ。り。と。小。文。吾。の。茶。を。薦。め。花。紅。葉。数。種。なる。菓子。を
 折。敷。小。積。登。せ。と。も。く。羞。め。たり。を。あり。と。配。饌。の。男。女。盃
 鉦。子。を。當。り。あり。美。壺。種。々。の。散。を。安。排。あり。と。郷。食。忘。特。小。叮。嚀。か。て

常武ハ之をとり盃とて揚ぐ大田との且毒嘗を仕らん其君命謀るよ
 甲斐なく肝膽もか洞胡越よ驚く可憎世の豪傑と入る籠もあつた
 意外の趣舎羞まはは餘りありあつたふかうも鮮々膝をおどえ
 歡びを盡しと一朝の苦心あはる主君の疑念を此の擇はる某月
 ぐらに方便さると亮察しぬいひひとての盃をさしぬ小文吾ハ
 進寄る受戴起る盃を側は指し左右の飲おは寔小圖がふふより去歳
 より衣食の頓養小預り今亦山海の魚蔬を雅られて浅くぬん款待を
 受むこと皆を賢大夫の客を愛しか好意おわはるをわぬ款待を
 これ小優まさき某の素市井の匹夫之近う故ありて兩刃を帶るとはた刃ハ
 一階の格式おく人は敬う徳もや然るをかくも懇切の謝しちるも
 憚りありとのを常武せあむを又介意ある不似たり故の席おはる

とちやくつられて小文吾ハ盃を持退ち酒ハ飲むややく竊小枕中へ
 傾け捨看も著を添ぬる露むりも食ざりぬとどく歩程小日の暮て
 彼此小置並べら菊燈臺此銀燭ハ死衆星の晃く如く和漢の細工を及る
 方圓の盃盤ハ恰室の巾小入る不似たり浩処小年四十よりある老女の指箱一
 たる夾衣を被て六ツ七ツむりある女の子のよと披くと甘あありある男子此肥て
 脂盈る身長も下髪さるが黄黒の袴を穿くもつれ立進て入る小文吾ハ
 指をさし然てある此傍あり常武これとるえりて小文吾ハ對ひ大田の
 是ハ前婦戸牧之彼の拙郎馬加鞍弥吾之母の海よりある女兒を鈴子と名づ
 りのそり子ハ四五人挙げれども多くの襦袢の中小喪して今冢子と季女の残り
 ちくかくりありとの小文吾膝を進めて飲びて連名告をさる小文吾ハ
 鷹揚小辭寡く応答訖む鞍弥吾も無礼け小英名ハ去歳ありて

耳小夷なる犬田との君父小憚りよしあれが面をのりせかこりしと本意
 ありとほひひふの國坐へ一刻千金先や背胸を霽まし武藝の業の
 りかれば弓馬擊劍槍棒卷法人小劣るうのあつひどもいふでまの遭ふ
 戦場の進退の熟士小穰りく姑くいれ折もあつ下試合希ひかといふ
 常武微笑く何を孩児が小くくひふあけ下魂いれどいれよ折あつ
 四天王小を召よしと酒を飲よよよと急せば次の間小果ひ居よ
 馬加が股肱の若黨渡部綱平ト部季六田井貞九郎坂田金平太
 阿と応して進ま入る額をつれその帝末小居並びく愈小文吾小う対ひ
 曩小當所へ入來の折主人の側小侍りうが面を怒られん某の渡部
 綱平某の云云と名告をせれば小文吾へと慇懃小礼を返しう各位を
 源頼光の四天王中も劣らざる勇士とい誰し知るべれ姓名といひ骨相といひ

憑くくといわれて四人の羞る色なく賢察のめく不幸中へ腕を破るべき鬼
 女小ぬあむ土蜘蛛をよ変化もゆ野飼の牛小ころを付れと鬼童丸も
 躲れをびの野の道の遠るれば大江山路を踏み酒顔童子が舊迹
 どもえとをせりハ残念至極小と續語為句の似非的宏言小文吾の
 堪ぐら笑を袖小包あむむ咳せむ紛々るかそ又さる散を添て
 け遍とく益を巡らも程小鞍弥吾と綱平小いやく酔ゆる癖あれば
 愈輪のゆく小文吾ととり環へ誇良小武藝相撲の技をどと珠々く
 論まれば常武これを推禁めくあむがもや何ぞもまてく武士の武士さ
 糞糞の糞糞臭がめくそと素ありれりあれがめりけりけり鳴呼り
 亭のく退けり季六との呼苗め汝ハ要時其処をれれ分付る要り
 ありとあふぬさの微笑あつ小文吾をえりく犬田とのさる傷痛を

えん仕伎輩が殺風景のつらさ酒の科あれば心わかけぬひをたたく憂を慰む
そののうら興が浅う頃日鎌倉の女田舎の幾人かへも来りて中の一入
堪能のえあれば呼ぶなり笛置うり渠を看ふ今一度過しゆくといふ声洩す
次の間を豫てあり緯の准儀をうら久大小の鼓を拍笛を吹く婢兒共々美次
打拍し出て縁頬に寄りて寄り當下と艶妖の少女の年の二八なりあるが
挿着縫箔もなる六尺袖の表衣に雑色の下襲しと炷籠る奇南の香も
そのあぬあふ今世の世なりとあつらゆる帝の禪りやしく幅廣紙を堅く家
締りする腰の風小靡く柳の如く姿の獨立る花に似たり色好み心のりく
今これとらんんや魂忽地天外に飛ぐこの君のあま命惜りたはとあふ
あれと小文吾へ性ごとく声色を嗜ざれは目前小生く来りてこの少女とまをん
らるの中奥に彈しとわびしがむとあひよりかそ件の女田舎のあつらあるド夫

婦のうらうも向ひく額をつれ又小文吾も額をつれを伴些し退はてこの
席の中央を前面にうつりて常武に咲けし遣ふをよをよとあつらふてせよ
李六よ汝は何とあつらふんこれ程の俳優閑場の白から素本の源氏を讀み
似る汝の武藝のうらやを後がうらあつらとあつらふを御に呼とあつら置らふをよとあつら
と促せ李六の醉小乗して些し推辞む氣色かく仰寔に理りもよくとあつらひ
りけく扇を取て尚歩進に出つ袴の襷積を左右小合て披せむつ件の
少女が左のうらお直り膝折伏しと霎時額つれ頭を擡ぐ詔する声を
ゆり發し東西々々南北中央の席上から大人君子へ敬て報せむ能出る
少女子ハ薪推し鎌倉下り名を且閑野と呼び甲斐小當今日の出せ堪
能りの當処へは初度の見参咲も揃にぬ初花小降るく雨の足拍子扇の風の
み毎の間小聊失つとありともその海津藻の光目多小閑とあつらふとあつら
てとあつらひまのうらあつら



女樂と聚合
常武小文吾
とてくちんす

小文吾

下野五郎

抑田乐的幾番あり。題目も亦多かり。を教へんはとゆりゆれど就中呪師
 侏儒舞田樂傀儡子唐術品玉輪鼓八玉之曲獨相撲小獨雙陸無
 骨有骨延動大領之腰支蝦渡舎人之足仕水上專當之取袴
 山背大御之指扇琵琶法師之物語千秋萬歳之酒樽腹鼓之胸骨
 蟾蝦舞之頭筋福廣聖之袈裟未妙高尼之襪祿乞形勾當之
 面現早職事之皮笛目舞之翁體巫遊之氣裝貌京童之虛左
 礼東人之初京上これら男田乐的會宗といふ所あるごと又この君を
 男の技中も堪能ゆく幾節竹の一本立八尋細の綱渡これら特小
 本事之さへゆりあぐる更困ればは後會の事とせむわく今宵は且
 今様の舞踏の態を仕らせく御笑小傳へまろ人是則桃源の故す小
 做ひたるいと愛ふれ一曲中山各一桃と名つけたりその為開場小す

工と。啗りきつる逃る如く次の間て退けら跡ハ咄と婢女ホが腹を
 抱へ立もあまの堪む弗と噴きけり。そが終俯しき笑あり山田の畔ハ
 樹隠れて日影不集と集る木兎のゝも知らを群雀これら狂入散動き
 且く鳴も已り多と于有然程はありまふ苗の音ハ鼓のあへ打をえく
 立ぞあがれる且開野が態も體も美し地抑是ハ讚岐州八嶋壇の浦のゆり
 あり弓削山の麓に住ひの賤婦や一日里の少女子とつれ立く同國八粟
 山遊びの程ふまの谷川の水よりゆとも愛ふれ盃の流れ基てハ原来
 この山の奥を浮世を避るる神仙のまじりもをわゆる人何処をよもつけ
 登りくくつらとをよとむひの峯の白雲谷の水源遠く事てえれば現
 玉鉾のみちをよふありてハ桃の林をわと唄ひゆせる声燈く佛此國に
 あそび鳥の迦陵頻伽もかくるとを月あそび舞の袖翳も扇の蝶その

閃やく桃の花 奴兒光 照添ふ 燈燭の花 物序 破急の 節曲比類
 へびく世の 俳優人の 数知らば 常武夫婦 鈴子ホハ 瞬もせむ 惚
 紙門障子の ありてより 覗く奴婢 ホの 幾人 軟人を 掻き推し死
 ありを 頭小頭を うち累ね 目小目 並へく 餘念を 恥し 時を 移り
 かくて 儂曲も 果し 戸牧ハ 豫く 婢兒ホハ ありけり 纏頭の 小袖
 一襲を めていそぎ 且 閑野は 取らせし 月を 終有ふる ちくちく 横笛
 鼓の 婢兒ホの 先立て 退け 時ハ 四月の 下院ゆく 夜の 短き
 比なれば 曉とも 加に 鐘の 声小東ハ ちくちく ありし 小文吾ハ 困り 果言
 俳優の 稍終ると ありて ありト 夫婦 別を 告ぐ 退き 歩んとして けり 残
 常武 頻り 小推 笛ゆく 何ぞ 急ぎ ぬれ 是 処も 彼 処も ぬれ 殊さ
 この 新亭ハ とも 眺望の 爲に 建たり 彼首の 窓を 推開け 墨田河の

流れ 大く ちくちく 流るる 即便これ 臨江亭と 命け 又樓上より
 眺れば 牛島 葛西の 海邊 遠く 眼下 小わを めて 對牛樓と 名つけ
 あり 誘ふ 薄茶 一服 進らせん といわれ 小文吾 推辞 せし 側小
 置る 腋 伸の 刀を 取て 立んと せり 白銀を めて 造り あり 桃花の 奴兒の
 何の 程ゆく 落か ちくちく 刀の 緒は 袂より ありし 切と 誑め 海を 不
 信り 婢兒 共を 見う へり 何人の 送らる 達を ありけり 向つ
 取て せし 一箇の 婢兒 受り あり 且 閑野ハ 物小 侍り 嚮ふ 茶を 捧ひ
 と 此 振送 せし 知ら ざり 小文吾 領なく あり 不 慮と 楚と
 届け ぬれ ちくちく ありし 引き 對牛樓 あり ち 登れ 常武ハ 婢兒
 あり 雨戸 送ち 閑せり 當下 小文吾ハ 且 頭を 叩いて 彼此と 見え 樓上 の 東向
 中僧 一山ガ 款印 あり 對牛 彈琴 あり 四字の 額を 掲げ 左右 唐の

王勃が蜀中九日の詩を白字小鏤る竹聯あり時ハ今夏と秋との違ひ
 あれども大田があやも亦望郷の基中北地より鳴雁のあはれは
 ととのんと詠れる都鳥ハ今もあつるをかくて欄干ふゆを倚せはしくと見
 ませせ天のそ明し横雲の色紙めたる筆ハあはれ誰が硯せ墨田河
 前面は黒泥牛嶋ハ宛も水臥せざるや彼方蒼蒼柳嶋ハ糸よる清ふ
 靡くふ似たり世間の何は警人朝閑趾ハ如と満誓詠々歌をあつ
 波ふ漁翁生涯一葉の舟東へ漕ぐあり西子歌あり葛西村落幾
 戸の烟南に沖あり北は滅るあり鎌田浮田行徳の浦々あれ秋とぞ
 ぞ目も迫ふ登る旭を舊里の方とすれハ翁さびし父の又親戚の
 り宵ふ湛くあつる甲斐とあはれ剣刀刃を浮橋の中絶し石濱の
 玉塵あり教蘊れる艱難憂苦の遺願ハ絶てありけり常武これを

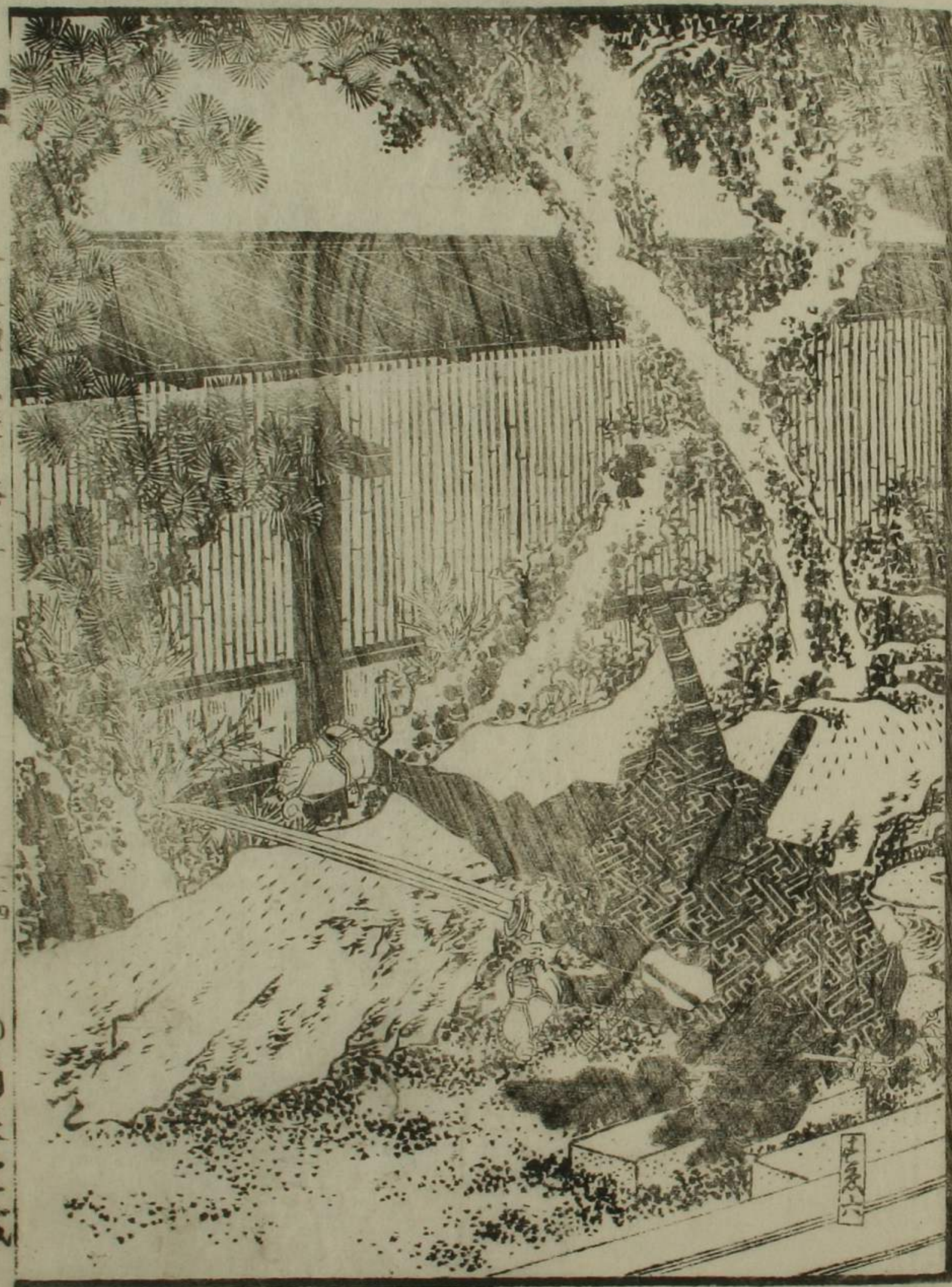
慰むく大田殿々々々物をもひあはれ尺蠖の伸んとまるとは且その
 身を縮むるハ窮達時あり運ふる下ハれ彼船をえあはれ久々
 水際ハ繫れらあり又真帆揚るまゝあり繫れ船ハ走らるる走
 船ハ笛とぞ和殿が今の滞留も只この理を悟るこれとぞ人ハ
 譬言ていそ君ハ船あり臣ハ水あり水ハ船を浮べく又よく船を覆る自亂ハ
 暗愚の弱將蒞来とぞ辨へぬれハ和殿を知りあはれ彼鄰
 國ハ敵のあは滅されんと疑ひハ某ハ亦千葉の一族馬加光輝ハ任
 ねれば代々取るとも誰ハ咎らん然れば享徳の例ハ傲く自亂ハ詰腹
 切らせ見鞍弥吾常尚を當城の主ハせとあはれあはれ
 智勇の軍師をゆき和殿今ありこれを佐けく事成るとは葛西の中
 半郡を宛行へしけ引とんやと小藤を進めて亦他もあはれ長けハ

且開野が所為ありし。の果してあつらんや。その鞍挿の刀の母より。
 彼釵兒を送せし。意ありてのりといふ。これも亦馬加が誘せんといふ。
 あつて。彼常武へ去歳よりして。それを推番め閑菴よりし。ふ。きの。
 猛小母屋小招だく親切うせし。歌儂酒宴を。あつて。
 渠ハ素より逆心あり。その主君より自胤ゆ。と亡さんぬふ。これを。
 股肱とせ。底意小あり。と。合せし。その密残を説破りて。密。
 陽あつて。引く如く。あれども。ゆり。と。今。志を改。き。の。あ。
 かの。慙む。ふ。色。と。これ。と。逆。徒。小。引。入。ま。ん。と。謀。れ。る。と。れ。と。う。と。ま。
 あ。つ。あ。れ。ど。も。初。より。渠。が。密。残。小。後。つ。ど。の。色。と。り。誘。め。を。怒。小。乗。り。
 罵辱し。渠。又。これ。を。速。小。害。せん。と。て。謀。る。と。め。と。と。も。か。つ。て。脱。れ。が。死。
 時。運。あ。つ。つ。あ。せん。今。義。の。為。小。捨。人。命。ハ。惜。む。ふ。し。も。加。死。と。あ。つ。て。歎。死。

送親の。送。小。生。死。を。契。する。四。犬。士。小。環。り。も。あ。つ。て。曳。小。單。節。が。往。方。
 ち。ち。索。く。の。空。く。あ。つ。誰。り。又。方。だ。あ。つ。つ。と。告。ぐ。と。これ。を。
 ち。ひ。彼。を。多。小。世。小。稀。あ。つ。き。旅。泊。の。悲。し。腸。を。断。巴。峽。の。猿。の。叫。ぶ。を。
 ち。ん。人。ハ。物。久。既。小。覺。期。を。究。め。ん。だ。も。脱。も。ん。程。ハ。脱。を。よ。れ。只。用。心。小。
 優。と。仰。と。あ。ひ。久。し。の。夜。ハ。殊。さ。つ。目。睡。も。せ。を。身。を。護。る。小。三。度。の。餌。も。その。
 餘。の。り。も。母。屋。の。扱。獲。目。下。小。然。然。と。復。招。れ。せ。ば。お。の。を。雨。暇。
 無。支。ゆ。と。十。日。あ。ま。り。を。過。せ。程。小。降。に。降。む。と。阜。月。雨。小。檐。の。玉。水。音。の。を。
 ち。五。月。中。辭。小。あり。と。六。懈。と。あ。つ。ね。ど。も。や。つ。つ。小。勞。倦。を。う。り。と。
 ち。一。日。甲。夜。より。假。寐。し。れ。ば。お。と。縁。頼。ある。雨。戸。も。引。ぞ。天。あ。つ。と。阜。月。雲。食。
 十四。日。の。月。隈。あ。つ。照。り。て。障。子。あ。つ。つ。人。影。あり。小。文。吾。忽。地。駭。死。覺。く。
 脱。落。小。と。遠。く。頭。を。擡。て。え。と。程。小。外。面。小。苦。と。叫。ぶ。声。り。て。撞。と。仆。く。

人音小文吾ゆびうち駭驚く刀を引提く縁頼の障子をささ
 開つれば紛々くもあぬ鑽隙の癖者も六刀を持あつて仰ふ
 ところその項のあつりあり。血の殺しう流れせり。この何の致るを不撃
 えとあつち目疑ひ且怪て白昼の如く明りたる月を便す条件の死
 骸を引起しつあゆめれば桃花の添飾しる白銀の釵兒を盆に
 窪の真中あり吐まを打込る只この奇異のまを替れて死し
 癖者の常武が股肱の若黨ト部季六ありれば原来常武が
 虚を猜してこのめを替と謀りしう違はざればこの釵兒の
 豫く怒まは彼且閑野が物と一受けはるるこの仇を殺せしを枝
 少女の秋渠の女田所あれども輪鼓品玉刀玉八玉綱渡の技をど
 ともく長らるものときつはる俳優より自然と熟して銃鏡を替るといふ

その妙をゆいもれあつたそれらあぬ秋とむりふ惑ひ八解ぬ夏
 傾く月の影をれば夜ハ丑三の比ありけをむく又小文吾いぬさ
 この季六が管殺されしとよく常武知られぬ渠あつた多勢も
 替捕んとほるる。かむ六死骸と推隠してぬあぬ貞あつた常武が
 せんやと勘察し生れを其処小究む。とひとり點頭く着竹の
 深小伏する心石を掻起して来て来て死骸の裳小推包に既中
 深水へやを沈む折る月ハ忽地雲隠れと朦朧とありあつた
 松を信ずる。その築垣と踰るものあり小文吾をかく透らん
 うあり。えうをわれと潜歩しつ月の程掩み袖垣を小盾をりく
 程小癖者の頬被せし拭の端を銜る築垣を閃りと降立あめ
 樹同々を遠く去り且縁頼もを掛く裡面の中うと透らん進ん



八十一卷六章卷二

下四

月夜草

五五八



桃花乃
 久見く
 釵見く
 刺客と
 撃殺す
 子殺す

小文吾

八十一卷六章卷二

月夜草

ち程小文吾をめぐり走り廻る癖者等と叫びもあらず刀を引たり引技よく破
らん吐き吐きとるう刃の下を彼此と潜り脱つて一間あり後がふふ飛退く
やよ大田郎一吾存て候り早ましく怪我をさしあらずと声掛け女子小文吾
討つて刃を小腹に引着て然る誰ぞと透し見る天もろろ鮮明の月を
吐く雲を越過る隈なき光おぼえればえ忘れしせぬ且雨野ははりともく
小文吾油断せぬ日面を忍ぶるのまじく物ひひられともおぼえ女子不
似げなく夜をともく垣を乗り越り界をたし潜びくまつる故のあつと問質
され恥づけげおの疑ひハ理りあらず暫おそく打りけくおん刃の仇を替
ぬる花釵見をえぬの心ハ大くおぼえれも見お物のぬえを相見する夏
野の男女郎花結ぶ露の玉掛笥のひあふあんとて神をくけ通流
たる木の葉お示せ水莖の深れおひを今知らぬ知らぬ薄情ともおぼえぬ

悪くか切くおん刃のふかりく死んとてお覚期く。牙あつと不使ともおぼえぬ。
心づくと怒まれ小文吾は冷笑ひ浮る技めく世を渡る俳優かひも
わんまゝ素より色を好む。お罪かく囚れをかり憂苦しを外れく。
化つて恋小靡んや。その実情おあつて。七竊小人お相譚れく。これお怒ん
便黠をく。これお恨しげお顔はく。とち瞻仰く。嚮く贈り。秋
のまじく然る疑ひを稟もせん女子のうおを有る。花釵児お血を添し。せ
誰か為かり死とあられん。希婦の陝布胸あつて。尽す。誠の届く。はとくく。
殺しおひねと刃お怖れを身を衝附く。覚期の氣色お小文吾のあつて。及ぶ。
會直む刃を引提く。背のくく立遠り。つあり揚ぐも些も騒ぐ。ぬ女子。一心
項を延し。背をく。あつて。小文吾。要時。とらん。か。く。刃を。握り。
綱をよ。治りが。け。當座の難美。よ。要時。念。とく。辭。を。や。け。死。を。ご。も

厭ぬをては痴情稍疑ひ解れども。いづれも通るる方の昔害とて。か
 かくも久後遂に死妹伏とて。ひ諦めとて。りく久り更り。このを且開野
 えより。然るゆゑ。あつちのあつち。いつて。さういふを。付く。竊小脱。はあ。ま
 るを束つ。寛る。人小苦。あられ。後終。不命を喪ひ。めん。いと。愚。か
 と。勵。れて。小文吾。ハ。嗟嘆。不堪。額を。押拊。脱れ。去ら。さ。ゆ。の。あ。ぶ。ら。ま
 かく。て。あ。あ。ん。彼。首。鎖。せ。諸。折。戸。を。踰。人。ハ。輒。き。さ。か。か。夜。ハ。殊。さ。ふ
 出入。を。許。ぬ。城。の。門。戸。を。い。つ。ち。あ。り。ま。死。と。い。ふ。を。且。開。野。野。あ。く。む。さ。亦。は。鼓。の
 伝。わり。さ。い。この。廿。日。あ。り。馬。加。殿。小。笛。や。れ。内。外。の。う。を。さ。く。知。れ。り。大。元
 戒。を。出。入。せ。り。の。昼。ハ。晝。の。符。牌。あり。夜。ハ。亦。夜。の。符。牌。あり。竊。小。方便。を
 脱。して。その。符。牌。不。入。ら。ず。難。死。と。い。ふ。と。其。死。示。せ。小。文。吾。ハ
 歎。面。小。あ。られ。く。さ。幸。ひ。の。う。あ。ら。え。咎。れ。れ。あ。ば。毛。を。吹。て。疵。を。求。る

後悔。あ。ん。疎。忽。の。舉。動。あ。り。か。こ。ろ。を。付。れ。バ。領。地。く。い。き。ま。さ。た。は。ば。
 只。一。日。を。過。さ。ば。死。力。い。づ。れ。危。う。さ。一。命。か。け。て。翌。の。夜。ハ。件。の。符。牌。を
 取。ら。ず。曉。も。あ。過。し。た。ら。ば。あ。の。川。の。用。意。して。俟。ひ。ひ。と。遅。死。辭。小。文。吾
 感激。して。か。つ。た。を。か。し。助。け。あ。り。く。脱。れ。て。さ。う。を。信。ば。これ。天。縁。の。竭。さ。る。
 豫。之。契。り。一。支。の。為。小。あ。り。ま。死。を。あ。果。く。ゆ。あ。く。この。身。の。落。著。ハ。迎。え。て
 妻。と。せん。嚮。小。卜。部。季。六。を。替。面。られ。銀。見。ハ。さ。さ。小。笛。め。く。あ。く。あり。
 受。納。め。る。う。い。ひ。返。せ。る。ま。り。く。睡。む。龍。の。腮。を。撈。り。と。採。珠。あり。も
 難。き。符。牌。を。取。る。歎。く。い。が。命。を。果。敢。あ。く。其。処。不。喪。ハ。欽。生死
 不。定。の。大。身。を。抱。へ。く。この。銀。見。を。何。せん。翌。の。首。途。の。向。草。小。柴。小。代。く
 道。祖。神。小。誓。ま。ぬ。せ。ん。と。曲。演。へ。る。尺。肉。り。と。投。入。と。伏。拜。と。立。あ。り。喃。犬。田
 卵。の。さ。び。さ。り。多。あ。れ。が。相。彈。小。程。ハ。短。夜。の。あ。く。小。明。か。岩。橋。の。契。り。も。遂。小

絶望つひに絶望す一ひと只ひと翌あしたの夜よをあちありあゆゆとをるるをいひひききて。故の樹このま間まを遠くく。
 裳かみ褰まげく築つ垣ぎへ登るるもた田いん樂ぐのあ技か不あ熟まとる身みのあ翩ひら一ひと閃ひらとと松まつの
 身みをりけく彼かの方かたのあ庭にわへ降るとも六む姿さのあ足あをたびありあり。嗚呼あ伶れい人じんやも隱いん君くん
 子こわり歌うた舞ぶ妓ぎも亦節せつ操そう遊ゆう俠ぎやくかうんややむ逢あ阪はん山やまのせ蟬せみ丸まるのあ采さい枯こ得とく失しつ
 遇ぐ不ふ遇ぐのこ理りを諷詠ぎやうし。みづくととれを琵琶びわをあ奏そうしてぬく濁だ世せのあ煩わづ悩なを
 脱だつ離りせり又また華か夏げのあ静しづ娼かうのあ鶴つる岡おかのあ社しゃ壇だんあま廷てい尉ゑい別べつ離りのあ愁しゆう訴そ不ふ信しん不ふ
 吉きち野の山ののあ歌うたをあ吟ぎんして右う幕まくら府ふのあ震しん怒どをあ怕おそれぬ況まい。せんどり。あかはのあ重おも衡へいをあ相あ憐あはれぬ
 死し不ふ至しり。又微ゐ妙めうがあ親おやをあ慕あこむ。あま。あ尼あま不ふあまるが如ごと也よとの所ところをあぬくりといふ事こと。
 畢ひ竟ま且かつ閑い野の竊せう小こ文ぶん吾がをあ資あけく又また甚し麼まある話わ説せつある。そをあ次つぎの
 卷ま不ふ解かい分ぶんとをとく知しらん。

里見八犬傳第六輯卷之三終

